

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520326
 研究課題名（和文） 脱領域的観点に依拠した「越境文学」としてのアンデルセン研究
 研究課題名（英文） H. C. Andersen's interdisciplinary research as a "Transborder Literature"
 研究代表者
 田辺 欧（TANABE UTA）
 大阪大学・世界言語研究センター・教授
 研究者番号：60243276

研究成果の概要（和文）：本研究はアンデルセン文学のなかで特にマイナーとされるジャンルを中心に、“移動”というテーマによってテキストを選別し、脱領域観点からアンデルセン文学を「越境文学」として検証することであった。空間と文化を越境しつづけたアンデルセンの流動的なマルチ芸術性に注目しつつ、アンデルセン文学が複数の文学領域、また文学以外の芸術領域と交錯するなかで「総合芸術」として創造されたことを考察した。その結果、単にロマン主義文学としての「総合芸術」の所産に留まることなく、現代においても、統合芸術として、常に新たな解釈の可能性があることが検証された。

研究成果の概要（英文）：Investigations in this study has concerned with a minor genre of H. C. Andersen literature, especially the literary works whose theme is about "movement", and regards them as "Transborder Literature" from the interdisciplinary perspective. The project aimed at focusing on his multi artistry which he has acquired by cross-bordering time and space, and discussing his "composite art" created by comprehending literary works and non-literary art. As a result, it is demonstrated that Andersen Literature is not only the outputs of the "composite art" in Romanticism, but also has many possibilities of new interpretation as "modern composite art".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：越境文学、北欧文学、比較、脱領域性、総合芸術

1. 研究開始当初の背景

従来、日本におけるアンデルセン研究は山室静、鈴木徹郎らによって、もっぱら童話研究、伝記的研究、日本におけるアンデルセンの受

容史研究に重点が置かれ、それらは日本におけるアンデルセン研究の古典的手法として、現代においてもなお確固たる地位を占めているが、研究対象テキストはほとんど童話に

限られており、それ以外のジャンルは等閑視されてきた。

一方、本国デンマークにおいては伝記的研究、ジャンルごとの各論的な研究、個々のテキスト研究は現在も存在するが、近年は文学という単一領域にとらわれない総合的なアンデルセン研究が盛んになりつつある。その傾向はとりわけ 2005 年のアンデルセン生誕 200 年を記念して開催された国際アンデルセン学会における研究領域を横断した研究発表や絵画、音楽の領域におけるアンデルセンの位置づけをめぐる資料が次々と刊行されるあたりにも顕著に認められる。かかる認識を踏まえ、本研究者は研究当初、日本における脱領域的なアンデルセン研究を模索しつつ、アンデルセンの詩と音楽との関係についての論考に着手し、日本におけるアンデルセン文学の未知の側面あるいは、周縁についての研究を中心に進め、その成果を発表してきた。

2. 研究の目的

本研究の目的はこれまでの脱領域的な個々の研究をさらに発展させ、まとめるための基軸を見つけること、すなわち アンデルセン文学をさまざまな研究領域を“越境する文学”として位置づけることである。70 年に及ぶ生涯の中で、アンデルセンはその大半を旅に明け暮れ、漂泊の詩人として“自宅”というものを一度も構えたことがなかった。越境者・移動者としての目が、「旅」、「遍歴」、「死後の世界」、「変身」、「匿名」、「演技」といったさまざまな“移動の表象”をあらゆるジャンルのなかに描出していること、そしてそれらがアンデルセンの脱領域的且つ流動的なマルチ芸術性と大きく関与していることを考究し、現代の視座からアンデルセン文学の新たな読みの可能性を探り、19 世紀ロマン主義芸術と現代芸術とのインターフェースとなっていることを提示することである。目的は以下のように大きく以下の 3 点に集約される。3 点の課題はそれぞれ段階を追って互いに関連し、全体として本研究課題の目的に到達すると考えた。

(1) アンデルセン原典テキストの分析: 本件課題の目的に合うテキスト選出作業、個々のテキスト分析を行い、テーマの解題から、個々の文学的表象の構造と相互関連性を探る。

(2) (1)の分析過程のなかから抽出した「時空間移動」、「越境」の表象が既存の文学ジャンルを脱領域化させ、「越境文学」という新たな文学定義・範疇においてそれぞれのテキストを関連させる働きを担っていることを検証する。同時に「越境文学」という未だ曖昧な概念を先行研究に依拠しつつ明らかにす

る。

(3) さらに「越境文学」という文学概念は文学の単一領域に留まることなく、他の文化・芸術領域、文化概念との関連において位置づける必要があることを考証し、同時に本研究課題において扱うアンデルセン文学の特性を析出するのに適正な枠組となっていることを提示する。

3. 研究の方法

本研究は資料収集を含めた現地での取材と本研究のテーマに関連したアンデルセン原典テキストおよび、再創造された現代テキスト読解を中心に行った。

(1) 「時空間の移動」、「越境」をテーマとしているテキストの選出を小説、旅行記、詩といったマイナーなジャンルの枠内でを行い、それぞれのテキストに表出された「移動」の表象を抽出および分析し、キーワード化する作業をとおして分類した。その際、分析に援用したのは一次的な理論書に『アラベスクとその美学的諸形式』(Niels Kofoed, 1999)である。

(2) 国内においては、越境・移動文学論および、それに関する文献の収集につとめ、同時に次年度分析対象となる、文学外領域の関連資料・文献の収集および調査をデンマークおよびドイツを中心に実施した。その中心は、実際のアンデルセンの旅にまつわる資料・文献、当時の地誌的資料、アンデルセン文学に関連した音楽関係の資料・文献に絞った。

(3) 前年度に収集した文学外領域の関連資料・文献の分析を中心を実施した。これは次の 2 点に絞られる。第一にはアンデルセンが生涯行った旅(約 30 回に及ぶ海外移動)における空間・物理的越境(移動手段と旅先の地誌的状況)と文化的越境(芸術、宗教、日常生活などに関する差異)について、手紙、日記などの実資料、またアンデルセンの旅に関する文献資料から分析を行った。第二にアンデルセン文学と音楽との関係について調査と分析にあたった。その際、分析をアンデルセンとの間に直接影響関係がみられる当時の 19 世紀ロマン主義音楽だけに絞らず、イズムに基づいて展開された各時代の芸術運動のなかでアンデルセン文学の音楽化が恒久的に行われてきたことへの意味を読み解きつつ、現代音楽の領域まで分析対象を拡大した。また前述の第二項目目と関連させ、前年度の分析で明らかにした文学的「移動の表象」の構造と個々の関係性を踏まえた上で、それらがアンデルセンの生きた時代、すなわち 19 世紀のロマン主義芸術領域および芸術

運動のなかで調和し自足しているのか、逸脱するところがあるのかを考究した。

(4) 最終年度はアンデルセン文学と音楽の関係について、おもに現代音楽との関わりについて考察した。具体的にはアンデルセンの没後に音楽化されたオペラ、歌曲などの調査と分析にあたった。2011年9月上演のアンデルセンの現代モノオペラ制作(脚本)をめぐる共同研究をおこなった。またアンデルセンのマルチ芸術性に関して総括を行い、さらにアンデルセン文学がジャンル、時代を超える「越境文学」として現代北欧文学、現代北欧児童文学といかに連関しているかを検証した。

4. 研究成果

(1) 本研究の初年度は「時空間の移動」、「文化の越境」をテーマとしているテキストの選別作業および個々の作品の連関性を整理し、いまだ入手していない関連原典資料、およびアンデルセンと音楽の関係資料の収集とその整理にあたり、22年度、23年度のための研究基盤を固めた。アンデルセンをさまざまなディシプリンから検証および研究した資料は書物あるいは論文として毎年デンマーク本国において新たに発表されるため、現地においてそれらの資料の選定にあたり、必要文献を入手することは大変意義があった。また日本においてはそれほど知られていないことではあるが、当時ロマン主義時代におけるアンデルセンと音楽家との関係、とりわけ交流期間は限られていたが、シューマンとアンデルセンに共通する芸術概念に着目し、そのための関連資料を収集することができたことも初年度の研究成果である。またこの研究に着手するにあたり、日本比較文学会・関西支部例会において、「越境文学としてのアンデルセン研究」と題し、新観点からのアンデルセン研究の可能性と意義について発表し、また参加者とのさまざまな質疑応答を介して、新たな着想点を得られたことも研究の展開に大きく参与するものとなった。

(2) 研究2年目は初年度に引き続き、既存の文献整理、新たな文献・資料収集などを推進した。まず、前年度後半に行った「アンデルセンと音楽の関係」に関する調査で入手した資料の整理を行い、それらの調査を裏付けし、同時に補強するためのさらなる資料収集に努めた。また次年度に企画されることになっていた現代作曲家・笠松泰洋氏によるアンデルセンのモノオペラ「人魚姫」との共同研究に着手し、新たな「人魚姫」解釈をめぐる互いに意見交換を行った。具体的な研究成果は次に挙げる2点である。まず「越境文学」「移動文学」の定義付けを確認するため、「移動文学」に関する研究書の書評論文を学会誌

に発表した。もう一つはアンデルセンと音楽の関係で入手した資料の整理をするなかで、とりわけシューマンとアンデルセンの書簡交換に着目し、それについての考察を世界言語研究センター・デンマーク語/スウェーデン語研究室の紀要に発表したことである。

(3) 最終年度はアンデルセンの没後に音楽化されたオペラ、歌曲などの調査に当たると同時に、平成23年9月に兵庫県立芸術文化センターにて上演されたモノオペラの脚本の監修に携わり、脚本家、作曲家とともにアンデルセン童話の現代的解釈(なぜ「人魚姫」には母親が登場しないのか→アンデルセン童話における母親不在の問題)をめぐる「人魚姫」分析の多様性を論議した。またアンデルセンのマルチ芸術性に関して総括を行い、研究の所期の目的、アンデルセン文学をジャンル、時代を超えて存在し続ける「越境文学」、「移動文学」として位置づけるべく、現代北欧児童文学におけるアンデルセンの影響、テーマの再創造について考究した。とりわけ、テーマ「越境」、「旅」を死のメタファーとして捉え、「子どもの死」がどのように現代北欧児童文学において継承されているのかについて調査を行い、その成果を平成23年5月、および7月に「アンデルセンと現代北欧児童文学」、「北欧児童文学に描かれるさまざまな家族—大人が子どもに死を語る」と題して2回講演するかたちで発表した。

(4) 前述の(1)～(3)の成果はこれまで国内においてはほとんど顧みられることのなかった新たなアンデルセン研究を提示するものとなった。日本におけるアンデルセン受容史(とりわけ童話研究、伝記研究)は明治時代以来の伝統であるが、それを継続、刷新していくために今後も新たな視座、そして文学というディシプリンに縛られることなく、研究領域をたえず「越境」、「移動」する総合的なアンデルセン理解が必要だと考える。今年度(平成24年度)よりスタートさせた挑戦的萌芽研究「死生観の文学空間—現代北欧児童文学における「死」の語り」が構想された経緯は、まさに、アンデルセンが、地域、ジャンルを越境し世界文学として確立された要因の一つに「子どもの死の受容」をテーマにしていることを看取り、ここに北欧児童文学における死生観の原点が見出されると考えたからである。そしてこのことが「子どもに死を描き、死を語る」絵本や児童書が現代において数多く出版されている現状に繋がっているとの仮説を立て、今後は文学領域と社会学領域の双方から検証する計画である。ゆえに、本研究の成果は新たな研究を支える基盤として機能すると同時にさらなる研究の展開が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 田辺欧、「アンデルセンとシューマンの関係をめぐって—書簡に見る詩人と作曲家の対話」、『IDUN-北欧研究』、査読有、19号、(2011)、123-145
- ② 田辺欧、書評・西成彦著『エクストラテリトリアル 移動文学論Ⅱ』、日本比較文学学会誌、査読無、52巻、(2010)、191-195

[学会発表] (計3件)

- ① 田辺欧、北欧児童文学に描かれるさまざまな家族—大人が子どもに死を語る、マザーズカレッジ連続講座・講演、2011. 7. 23、神戸YWCA
- ② 田辺欧、アンデルセンと北欧児童文学、子どもと子どもの本の講座・講演、2011. 5. 27、大阪YWCA
- ③ 田辺欧、「越境文学」としてのアンデルセン研究、日本比較文学学会、2009. 4. 11、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田辺 欧 (TANABE UTA)

大阪大学・世界言語研究センター・教授

研究者番号：60243276